

風土



十月桜

神蔵器

紅葉且つ散つて分福茶釜かな

十月や寺にとどきて竹箒

名月のあればすなはち源義忌

蟪蛄に会ふ桂郎の声とんで

鶉猛る旅に目覚めて『田舎教師』

蓮の実とぶ桂郎の来て明史来て
茶の花やふふみこぼして金の薬
十月やどこに立ちても透きとほり
大空をあけて白鳥飛来待つ
西行を恋へば十月桜咲く
桂郎忌背中合せに冬の立つ
ばら百花風呂に投じて桂郎忌



竹間集

同人作品



赤げら

相沢有理子

色鳥のめつきり減りぬ火山帯
なべて死と深き閑はり文月尽
牧童のさやかに暁けの乳しぼり
森深し赤げらが打つ丸木小屋
村祭白粉刷きし子等戯れる
鎧戸の色褪せ森の秋闌ける
秋気澄むバンドナ粹に装蹄師

稲 筵

小林 輝子

風の道けもの道とて夕花野
岳に日の傾ぐままこのしりぬぐひ
道幅の空や七段稲架を組む
十方の山十方の稲筵
割裂^{わつさき}木を軒の高さに雁来月
大藁屋嫁菜の花の中に朽つ
長き夜を使ふ詫状一通に

秋 扇

小野寺節子

秋扇開いて閉ぢる世話人会
留守電話きけぬ難聴星月夜
溢蚊は雨打つ窓を徘徊す
秋めくや雑木林の木々の影
咲き揃ひ仏むかへる彼岸花
彼岸花先づは仏をお出迎へ
二坪の中庭に虫鳴いてゐる

甲斐の空

田村すゝむ

葡萄切るたび軽くなる甲斐の空
妻消えてよりの歳月芙蓉咲く
水音のいのち輝く竹の春
穂芒御坂峠にての揺れ始めたる峠茶屋
秋富士に似合ふ太宰の文学碑
花芒富士を見てゐる「太宰の間」
空澄みてその名も太宰の天下茶屋

茶毘の道

瀬戸

悠

観音堂色なき風の吹き抜けて
原爆の日のゴリラの檻に人集り
秋風鈴鳴つて釣宿勝手口
銀婚の娘夫婦や水澄めり
啄木鳥の銜をかへす源氏山
胞衣塚のあたり鶏頭抜かれあり
茶毘の道ひとつころげし臭木の実

団栗

塩田博久

好物を知られてをりし敬老日
兄弟の白髪の揃ふ秋彼岸
団栗や童心むしろ父親に
すいつちよや日暮れの早き切通し
萩叢を顔で分け行く海蔵寺
小学校も中学校も稲穂波
かな同期会にてかな聴く母校ひぐらし小学校

法師蟬

田中佐知子

冬瓜のぶつきらぼうに置かれあり
名水の里の稲刈日和かな
縮まらぬ夫との齡法師蟬
貰ひ湯の昔ありけり盆の月
小鳥来る反抗期の靴大きくて
雨止みて風のうれしき猫じやらし
抜け道のおなもみの棘やはらかに

天空の城

小野寺節子

野路の秋「天空の城」永へに
秋惜しむ飯田城跡の夢枕
天空の城の秋容たたずまひ
病葉や何を語らむ城の柱
兵の声をむすびし露の玉
露草をあやす城跡の風の声
兵の涙雨かな秋しぐれ
天空の城ふところの螢草
天地の秋思を旅のふところに
文月や思ひ出づくりの乾杯す

山河集

同人作品



神蔵器選

豊年や赤子まるごと手の中に

雨宮 桂子

良寛のひとり遊びや葛の花
秋蝶の来て五合庵の華やげる
天領の里の門ありいぼむしり
赤ん坊の握りこぶしや新松子

鬼灯の一顆を入れてグラス売る

中根 美保

胡麻干すや島の石垣余すなく
秋晴や消火バケツにペンキの字
ひとしきり光りて凧ぐや芒原
山霧の端に入り日の当たりをり

鳩の羽一枚拾ふ瀬祭忌

布施まき子

虫の音や平和の森と名づけられ
きちきちの確かな音をのこし去る

大社に寛永縁起鳥渡る
墓碑名は本名のまま木の実落つ

井口ふみ緒

天上の水あまからむみみず鳴く
母と同じ九十四歳水の澄み
秋あかね下り来て甘し崖掛の水
鈴虫の鳴き止む闇の濃かりけり
菩提寺のどこまでも墓地吾亦紅

園児らに歳聞かれをり敬老日

森田 節子

墓に刻む音譜一節小鳥来る
説経の「一日一生」芙蓉咲く
灯籠に日月ありて水澄めり
鱗雲鳥が進路を変へにけり

◇特別作品◇(抄)

沢内村銀河高原にて

土井ゆう子

花野ゆけば木道に会ふ狐雨
くきくきと曲る木道蝦夷竜胆
鳥兜木道より手の届きさう
けもの道行くに爆竹秋半ば
この先に熊くま架だなあると栗拾ふ
山栗を拾ひ熊架見に行かず
地の人に貰ふ山栗掌に余り
尺蠖を小枝の先に移しやる
団栗をぷちぷち踏みて子に返る
露天湯に先客小望月に暈

風土独語／神蔵器



秋めくや立てて置かるる米袋

柿沼 盟子

戦後、ほどなくして、それまでの長い歴史のある藁で編んだ俵に米を入れて出荷したものが、たちまち、袋に入れるようになってしまった。

掲出句は農家でも、町の米屋でもよいが、私は作者のご自宅、毎度、取りつけている米屋の主人が、意気揚々と勝手口に新米をでんと立てて置いていったのではなからうか。おそらく十キログラムの白い袋、秋田県産の「こしひかり」か「めんこいな」であろう。

米袋は季語ではない。しかし、この句の米袋は「立てて置かるる」で、あたり全体の空気が一変し、目にも耳にもはつきりと秋の気配を感じさせている。袋の中の米はまさしく精米したばかりの新米、一粒一粒立っているように美しくかがやき、すこしあお味のある新鮮な匂いまで感じられるようだ。

紐渡すレーザーディスク鳥威し

石井美智子

人間と鳥たちの智慧くらべも、ついにここまで来たのかと驚かされる。

データディスクには、CD（コンパクト・ディスク）、DVD（デジタル・ヴァーサイル・ディスク）があるが、レーザーディスクはCDやDVDより大きく三十センチほどある。現在は販売停止されている。用途は映像・音楽であった。

鳥威しに使われているのは、ディスクの裏面で、一見、きらきらとかがやき反射鏡のように見える強烈な光（レーザー）に、流石の鳥たちもおそれをなして近寄れないという。

掲出句はよく解らないが「紐渡す」とあるので、ディスクを吊り下げて置くだけではなく、稲田に直接張り渡した紐からレーザーを発し「寄らばただではおかない」と鳥たちに最後の警告を発しているようだ。

胡麻干すや島の石垣余すなく

中根 美保

初島吟行の所産のようである。

胡麻は九月の中頃になると刈り取りに入るが、一本の全部が同時に熟すことはないで、下の方のものが開裂しはじめたところに、根ぎわから刈り取る。もし、刈り取りがおけると、どんなに慎重に刈り取っても、上部のすでに成熟した種は地面にこぼれ落ちてしまうのである。

刈り取った胡麻は小束にして、家庭用ぐらいであれば戸口や縁側に立てかけて干し上げるが、島ではそんなわけには行かない。どこの石垣もぎつしり余すところなく干している。

島の戸数は天保の昔から四十一戸に決められているという。これは島の漁業の労働力を維持する網株制度で苛酷と思いつながら理解されるが、農業の耕作面積は限られている。

初冬の島の懸大根、そしてこの石垣の胡麻干しは、小さなこの島を愛し、いつくしみ、島と共に生きて来た、確かな証しの風物詩である。(以下略)



風土集



神蔵器選

秋めくや立てて置かるる米袋 東京

柿沼 盟子

露坐仏のまへ抽んづる鶏頭花
だらだらの坂登りゆき赤とんぼ

舞鶴

山本 町子

土壁に十日の月の影著き

きのふよりけふ音高き鉦叩
盃の月を飲みほし長寿かな

京都
杉本葉土子

名月や東山こそ一番地
夏酒れの大井川に立つ親子鷺

阿南

島 玲子

父の忌に越後の酒と菊脛
秋の蟬モノトーンなる声の壁

妙尊寺

川崎

内藤 静

虫すだく鐘楼門を辞するとき

一本の海峡渡る月の道

佐倉

松崎 雨休

糶田をつらぬく大河遠筑波
薄墨の封書をひらく雁のころ
ふるさとの日向大きく秋彼岸

鳥も雲もいれかはりたる九月かな
寝つかれぬ平屋仏間の虫しぐれ
登高の九十九谷や比企郡
天高し老樹の囲む物見山